

●●● 若者たちの熱戦 ●●●

全日本製造業コマ大戦 2022 東北地区学生大会

土俵上での熱きバトル 各校の意地がぶつかり合う

学生たちが自ら構想・設計・製作したコマを持ち寄り、土俵上にて1対1で戦う「コマ大戦」。11月19日、今年度の東北地区学生大会が、柴田町の槻木生涯学習センターで行われた。当日は各校が趣向を凝らしたコマを披露。手に汗握る熱戦が、次々と繰り広げられた。



優勝 宮城県工業高等学校 Cチーム

軸先をボール状にしてバランスを取りやすくしたほか、ベアリングを搭載して相手の衝撃を吸収できるように工夫しました。優勝はできましたが、「もし戦っていたら負けかもしれない」と思うようなコマばかりでした。来年も出場して、連覇を目指したいです！（一年生・鈴木銃座さん）



6校16チームが白熱の名勝負を展開

今大会には、仙台高等技術専門学校、宮城県工業高等学校、古川工業高等学校、伊具高等学校、白石工業高等学校の県内5校と、山形県から村山産業高等学校の1校、計6校が参加。総勢16チームが出場し、トーナメントで頂点を競い合った。使用するコマのルールは、直径20ミリ以内、全長60ミリ以内であること。昨年からは材質の選択が自由となり、ぶつかった時に相手へダメージを与える重量型のコマや、軽量で持久力に特化した「さざり系」のコマなど、各校が細部までこだわりを施したコマを製作した。また、相手に応じてコマの回転方向を変えるなど、投げ手も様々な工夫を仕掛けながら

勝負に挑んだ。激戦を勝ち抜き、頂点に輝いたのは「宮城県工業高等学校Cチーム」。攻守に隙のない総合力の高いコマで勝負し、他チームのコマを総取りした。また、伊具高等学校の「IGUぐんぐん丸3号」が準優勝、「村山産業高等学校Aチーム」が3位となった。主催した仙南マシニングクラブの熊谷裕一会長は「勝つためにどんな工夫をすればいいか、それを考えることがものづくりの醍醐味でもあります。未来のものづくりを支える存在として、今回の経験をこれからの人生に生かしてほしいです」と参加学生たちへエールを送った。



勝負に挑んだ。

激戦を勝ち抜き、頂点に輝いたのは「宮城県工業高等学校Cチーム」。



旋盤を操作しコマの製作に励む及川さん

前年度準優勝校の仙台高等技術専門学校からは今回3チームが出場。先輩の雪辱を晴らすべく、本格的にコマの製作に着手したのは10月下旬からで、学生同士で話し合いを重ねながら、材質や形状の異なる3種類のコマを大会に向けて製作した。「軸に少しバリがあるだけで、土俵上で倒れやすくなってしまいます。仕上げ面をきれいにする作業が特に大変でした」と振り返るのは、機械エンジニア科一年生の及川闘斗さん。今大会では残念ながら上位進出はかなわなかったが「燃え尽きたわけではないので、この経験を来年につなげていきたいです」とリベンジを誓った。

仙台高技専の
コマづくりに密着！

～学生向け技能イベント紹介～

令和4年度「高校生ものづくりコンテスト」宮城県大会

未来を担う高校生たちが 技術と知恵を堂々披露！

高校生のものづくりへの興味・関心の喚起、技能・技術の向上などを目的に開催されている「高校生ものづくりコンテスト」。今回は10月28、29日に開催された旋盤作業部門、11月2日に開催された電気工事部門の県大会の様子をレポートする。



旋盤作業部門 優勝
古川工業高等学校 澁谷 知希さん

大会出場にあたり、部活動で3カ月以上、ほぼ毎日練習を行ってきました。今回、特に注意したのは仕上げの際の隅部の見栄え。練習の回数を重ねたことで、本番ではうまくいったと思います。とはいえ、まだ作業の段取りが悪いので、東北大会までに改善していきたいです。

旋盤作業部門



生徒10人が練習の成果を競い合う

仙台高等技術専門学校を会場にして行われた旋盤作業部門には、10人の生徒が出場した。初日は午前と午後2時間ずつ練習を行い、2日目の9時30分から競技がスタート。標準作業時間は2時間30分、最大3時間の制限が設けられ、事前に渡された施工図を基に、各々が高い集中力を保ちながら作品の製作に取り組んだ。完成後の審査は、ものづくりマイスターの安部隆雄さんらが担当。仕上げ面に不良がないか、寸法通りに作られているかなど、それぞれの作品を細部まで確認しながら採点した。厳正な審査の末、今大会は古川工業高等学校二年生の澁谷知希さんが優勝に輝いた。



電気工事部門 優勝
仙台工業高等学校 小林 暖弥さん

ケーブルの配線作業が苦手なので、器具とケーブルを最初につないでから壁に取り付けるといった工夫をしました。大会前は1日2回の試作で練度を高めてきましたが、本番の作品の仕上がりが納得のいくものではなかったので、東北大会は見た目のきれいさにも気を付けたいです。

電気工事部門



生徒13人が難度の高い作業に挑戦

大崎高等技術専門学校を会場にして行われた電気工事部門には、男子11人、女子2人の計13人の生徒が出場した。当日は25分間の材料確認・準備時間が設けられた後、競技がスタート。一般家庭の電気配線をイメージした施工図に基づき、金属管工事やケーブルの配線、各器具の取り付けなどの作業を行った。制限時間は1時間40分だったが、出場13人のうち時間内に作業が完了したのは7人のみ。大会を終えた生徒からは「難しかった」「時間に追われて大変だった」といった感想が寄せられた。審査は大崎高等技術専門学校の草刈聡技術主査らが担当。98・4点を獲得した仙台工業高等学校二年生の小林暖弥さんが優勝に輝いた。